拙著「社會學原理」の批評に答ふ

（雜　錄）

高田保馬

此一文は日本社會學院年報第六年第四、五合册所載文學士二子石武喜氏「高田保馬氏の二大近著を評して二三の純正社會學問題に論及す――社會學原理及社會學的研究」に答ふるものである。一體は之を日本社會學院年報に寄すべきでもあらっが、同年報は普通年二回發行の事になつてゐるからして發表迄に半年を待たなければならぬがため、敢て茲に本誌に請ひ其餘白を借る事にした。蕪雜なる此小篇によりて貴重なる本誌の紙面を汚した事は恐縮にたへない。

二子石學士が拙著の爲に批評の筆を執られたる事に關しては著者として十分に其勞を感謝する所である。併しながら其所論を見るに及びては最初の一行から意外なる失望を感じた、最初の書き出しそのものが既に全篇の內容と評者の態度とを語つてゐる。

學士の言によれば「年來京都東京兩大學の雜誌に逐次發表せられたる論說に社會意識論の一章を加へて之を所謂學的系統に編列せられたるは前者（社會學原理）」であると云ふ事であるが、これは著者の未だ知らざる事實である。社會學原理の第三篇以下七百五十頁の中雜誌に公にしたるものは二十頁に過ぎない、第一第二二篇も第一篇の第一第四の二章第二篇の第三章と第四章の大部分の外は嘗て如何なる形に於ても公にしなかつたものである。頁數から見ても千三百八十頁の中公にしたるものは總計三百八十頁に過ぎない。新に社會意識論を加へたと書いてあるが社會意識論の大部分

こそ嘗て哲學研究、國民經濟雜誌等に發表したるものである。學士は何の根據によりて此事實を製造せられたるか。

學士の駁說は大抵論理の上に構成せられてゐない、これが著者として答辯を書くのに最も困難を感ずる點である。余の立論の組立を檢査し論據そのものを衝かずして、而して直に結論を否認すと揚言してある。中に理論的組立を有する部分があれば余の說の誤解の上に立つものである、從ひて前後二十頁の論文中不幸にして何等學士の所論に承服する點を見出し得なかつたのみならず、之を機會として學士の所信に一二の批評を加へたい。

先づ余が方法論を後廻しにして社會學原理の本論を構成したと云ふ點に關する學士の非難に答へる。學士曰く、「若し學士(余)にして方法論的認識未だしとせば決然意を決して社會學の述作には着手すべからざりしなり、」「學士が社會學的方法を有せずして社會學を立て其原理を得たりとは僞りなり」、「學士の一千八百頁の文字文句は一連の方法範疇によりて列ねられたる社會學的認識の一大樓閣なり原理原則方法形式は一字一句悉く皆之を語らざるはなし」(日本社會學院年報第六年六一四頁)と。

學士の所謂方法論的認識とは何ぞや、そは學の方法そのものなるか、又は學的方法の認識論的知識なりや。前者なりとせば余は自ら學的方法を有せずと云ひたる事も信じたる事も無い、學士が社會學的方法を有せずして社會學を立て其原理を得たりとは僞りなり」と云はるゝも、余は如何なる機會にかゝる斷言をなしたるか、請ふ學士によりて之を發見したい。これは學士が事實製造の第二例である。學的方法の認識論的知識なりとすれば「社會學原理」凡例に述べたるが如く、余の見なほ極めて未熟である。併しながら、これあるが故に

「所謂社會學の原理原則なるものは公表すべきにあらざりしなり」と云ふ學士の言は學問の性質を知らざるに出づるものと思ふ。

余の方法論の叙述を後にしたる理由は凡例中の社會學ありて其方法論あるべしの一句に盡きて居る。學士にして此點から余を非難せむとせられるならば此論據そのものに批評を加ふべきである。學士の論駁は此根抵に向つて居ない。物理學化學に見ても此等の學問の成立はその方法の認識論的知識の完成に俟つものではない、余の云ふ方法論は常に此等の學問の成立したる時に其よりて立つ所の學的方法を跡づけ認識論的考察を加へる事によりて成立する。「余は今經濟學の認識目的從つて經濟學そのものゝ creation を試むるものではない。カント以前にも既にケプラー、ガリレイ、ニュートン等ありて自然科學は確立して居た。而かもカント起つて自然科學は初て論理的に立證せられた」（左右田博士經濟哲學の諸問題一〇一頁）。

敢て學士に問ふ、社會學のみ何故に方法論の研究未だしき間は構成せらるゝを得ざるか。なほまた學士は余が方法論的認識未だし」と云ふ事から「方法範疇なくして學を立するもの」と斷言してゐられる。此斷言は學的方法と方法論との混同の上に立つ。而して學士の誤謬は此混同に存する。余は學的方法（これは曖昧なる言であるが）を有せずと云ふのではない、現に之を有するが故に未熟ながなら一の組織の展開を試みたのである。たゞ此學的方法の認識論的知識は極めて不十分であると云ふのである。此點は、數多の物理學者化學者が其學的方法の認識論的研究が不十分又は空疎にして而も其學的方法の上に立ち學組織を構成するのと少しも變りは無い。

要するに、判然區別せらるべき學的方法と此方法の認識論的知識とを混同し、此混同の上に立ち

て、非難を加へらるゝのは迷惑である。かくて、此點に關する駁論は何等余を承服せしめ得ざるのみならず、余は此の混同に就いて學士の三省を望む。

さて此の問題を外にして云へば、學士の駁論は一、社會及社會現象の觀念、二、社會法則概說、三、社會學社會進化論及社會科學の性質地位の三に分れる。今順次に答辯を試みたい。

(一)社會及社會現の觀念。學士の所論はほゞ五段に分れる。余は逐一之を吟味する。

第一、社會と社會現象との關係(五九六——五九九頁)。此の點に關する私見の骨子を先づ述べる(一)經濟と云ひ宗教と云ふも經驗的實在を一面から見たものであり、これと同樣に社會卽ち結合も之を一面から見たものである、故に宗教結合などから離れて經濟の研究たる經濟學が成り立つ樣に經濟宗教などから離れて結合の研究たる社會學が成り立つ。卽ち社會現象より離れて結合を考察する社會學は可能である。(二)社會結合も其他の社會現象も共に經驗的實在を一方面から見たものに過ぎぬ、世間上下の關係はなく相對立するものである。從ひて結合の學たる社會學と社會現象の學たる特殊社會科學とは對立の關係に立つ。實に結合の現象は決して他の社會現象を包括するものでは無い。

此點に關する學士の駁論は幾回となく反覆熟讀するも其中に一貫せる論理を捕捉し難い。しかし大體の主意は社會卽社會現象である、二者は不可離のものである、社會卽ち結合のみの研究は成立し得ずと云ふのが其一、一切の社會現象は「社會を離れては得て解すべきものに非ず」「結合作用を離れて一切の現象は其存在を保持することなし」(五九八——五九九頁)、故に社會結合と社會現象、社會學と社會科學とは相對立するものに非ずと云

ふのかが其二であらう。實は此種類の考は拙著の中にも參考までに幾多列擧したる所で別に新しく學士の教に接するまでも無い。たゞ私はこの見方をとり得ないまでである。

之に對する批評は拙著の中に反覆して說いた所であるが順序上、こゝに略述して學士に御答をする。學士の云はるゝ如く社會と社會現象とは不可離であるとしても社會卽ち結合のみの考察が何故に成立し得ざるか。物理現象と化學現象とは不可離であり、生理現象と心理現象とは不可離であるとしても物理學が化學現象を、生理學が心理現象を對象とせざるべからずと云ふ理由はないではないか。學士は學問の區別が見地の差に存する事を知らるべき必要があると思ふ。(如上社會學が社會現象を對象とせずと云ふ點についての答である)。次に余の社會學が社會科學と對立するものに非ずと云ふ學士の論據は「人文現象は集團性に根脚し後に述ぶるが如く吾人の所謂社會を離れては得て解すべきものに非ず」「結合の火花は散つて宗教となり道德となり乃至一切現象となり結合作用を離れて一切の現象は其存在を保持することなし」(五九八——五九九頁)と云ふ點に存するらしい。しかし此云ひ表はしは曖昧である、卽ち靜的に見て、社會を離れて社會現象なしと云ふ事をも含むか、又は發生的に見て結合をまちて社會現象は生じ來ると云ふ事のみを意味するか、判明しない先づ前者の意味であるとすれば、社會卽ち結合を離れて社會現象なしと云ふ故に社會學が上位の學問でありとするならば、同樣の權利を道德學(論理學とことなれる)も經濟學も要求する事が出來る。道德も經濟も結合と同じく同一經濟的實在の諸方面に過ぎない、從ひて例へば經濟を離れて他の社會現象はないからである。併し學士の眞意はたゞ發生的の意味であらう。然らば旣て答へる、法律

道德等の社會現象は結合をまちて生じ來るとするも、同樣に一切の社會現象は經濟をまちて生じ來るのみならず、結合そのものすらも經濟をまち、之に制約せられて生ずるではないか。其上また、結合が他の社會現象を生じたと假定したところで、それ丈では社會學をたゞ primus interpares たらしめるに止まる、社會學と社會科學との間に從屬の關係が生ずると云ふ何の論據にもならない。學士若し余の說を破らむとならば別に新なる論據を求めらるべきであつたのである。

以上は學士の議論の中から其斷定の論據となるものを探し出してこれに御答へしたのである。學士の立論の形式から云へば、最初に議論の出發點となれる書き出しから全然吾人の了解に苦しむ所である。

學士は曰く「學士(余を指す)の所謂社會は人類結合現象にして社會現象の一部を占めそれ自身は卽ち社會現象なり」、「學士(余)は特に廣義なる語を冠せらるゝと雖も社會＝社會現象なる方程式を宣明せらるゝには些の狂歪ある事無し、學士(余)は社會と社會現象とは截然として相別たるべきものと述べらるゝも實は截然相別たるべきものに非ざる事を證明せられたり」(五九七頁)と。

余は勿論社會は結合現象として社會現象の一部を占むとは述べて居る。併し乍らこれから直に、社會は社會現象に等しと云ふ方程式が生じ來るとは信じない、之を斷定する學士の論理からゆけば犬は動物の一種なりと云ふ事から當然に動物＝犬と云ふ方程式が出でなければならぬ。此驚く可き論理の上に立ちて、余を以て社會＝社會現象の方程式を認むるものとなし、社會と社會現象との截然相別たるべきものに非ざる事を證明したりとせらるるも、余の論理は全く之と異なつて居る。而して、此の如きは實に學士の駁論の最初の一段で

學士が態々との圖形(而も此圖形も誤つて居る)まで入れて入念に論じられたる內容である。學士又曰く「先には社會と社會現象とは截然別つ可きものなりと宣して實は前者は後者の一種なりと豹變す系統論理の正確を生命とする學究の態度に非ざるなり」(五九九頁)と。犬と動物とは截然別つべきものであると云ひ、次に犬は動物の一種であると云ふのが何故に豹變であるか。これが豹變と見たる爲には學士の如き驚くべき論理を有しなければならぬ。此の如き論理の上に立ちて、「系統論理の正確を生命とする學究の態度に非ず」と非難し得る學士は幸なるかな。

學士は又曰く社會と社會現象との「三者を別個獨在の不關者となすは非なり」「諸多の社會現象とは全く別個獨立の結合現象」を認むるは非なり(五九八頁)「二者は尙ほ別個獨立のものなりと頑する か」(五九九頁)と。余は拙著の中明日に「人人の結合や種種なる社會現象はそれぞれ相孤立し別存せる事實なりと見るべきに非ず」(社會學原理六頁)「結合現象と云ふも決して單獨に分立せる事實あるに非ず、そは或一定の見地より見たる歷史的社會的實在なる事これなり」(同七八頁)と說いて居る。學士は何を目あてに「肉なき血なき骸骨結合」、「暗夜の妖怪結合」と云ふが如き言辭を以て非難せらるゝか(五九八頁)。余は學士は拙著のせめて最初の十頁なりとも之を精讀したる後に批評の策をとられざりしを惜む。學士はなほ余の極限の場合としては社會現象滅して社會結合のみ存在する事を得べしと云へる言葉の中から極限の場合と云ふ條件を除き去りたる命題を引用せられて居るが、これは余の迷惑する所である、極限の場合と云ふ事の意味が學士には理解せられて居ないのを憾む。

最後に學士の態度の矛盾を一言する。學士は結

合現象の考察が一の學問として存在し得る事を否認せらるゝや如何。「學士(余)が此未成年者(結合現象)を以て新に社會學を樹立せむとす後見因子の附加(他の社會現象の事ならむ)あるに非ざれば不能なりと云ふべし」(五九九頁)と云へるは之を否定せるものである。然るに余の社會學原理を以て「結合學原理としてはげに絶好の寶著ならむも」(六〇〇頁)と說かれたのは之れを肯定したるものである。余は何れを學士の眞意とすべきかに迷ふ。

第二、社會結合と社會學(五九九—六〇〇頁)。學士は余が社會を以て結合現象となし結合の考察を社會學となすに反對し、而して曰く「社會」の二字を特に附して數千萬語を其辯解に用ひ然かも其の効果の零なるに至りては徒勞の極致と云ふ可し、河田博士、山口博士の質疑も只學士が此「社會」の二字を用ひられたるに由り吾人の敎示を仰かんとする亦其大半は之れに基くものなり、結合學原理としては絶好の寶著ならんも「社會學原理」に非ずして「社會學與義なり」(六〇〇頁)。最初に云ふ、河田博士の紹介中には此點に何の質疑もない、社會學の觀念に二種のものがある事を述べられたのである、山口學士の批評は全然此問題に觸れたるものではない、以上の如く述べらるゝのはこれ學士の事實製造の第三例である。次に批評の內容に移る。

余は社會を以つて有情者の結合と解するが故に社會の學卽有情者結合の學であると云ふのみである。何故に社會學と云ふべからずして結合學と云はざるべからざるか。宗敎の本質を神聖性に求めたるものが宗敎の考察を宗敎學と云ふべからずして神聖性學と稱せざるべからずと云ふ論據いづこにあるか。倫理の本質を本務にありと見るものあり、其の倫理の考察が本務の考察となる故を以つて、彼の倫理に關する學組織は倫理學に非ずとて

本務學なりと云ふ理由はいづこにあるか。一切の定義は學者の見る所によりて定まる、況んや學士の認めらるゝ如く「社會の語義尙未確定の境地を脫せ」ざるをや。余は余の見る所に從ひて社會を緒合と見るのである、而して社會の學なる以上、結合の研究卽社會學である。此點に寸毫の論理學的缺陷ありや如何。

「社會の二字を特に附して數千萬語を其辯解に用ひ而も其効果の零なるに至りては徒勞の極致と云ふべし」と云ふは學士の放言である。余は一定の論理的結構を以て余の主張を敢てして居る、然るに學士は其前提の當否を檢せず、推論の是非を見ず、何等の批判なくして直に此斷言をしてゐられるが、此の如き放言は學問的論爭に於て最も愼しむべき事と存ずる。効果の零なるを主張せむとするならば正々堂々の論陣を張りて余に向はるべきであつたのである。

序ながら云ふ、余の「社會學原理」が結合の考察なるが故を以て「社會學原理に非ずして會社學奥義なり」と主張せらるゝも、グムプロヰッチ、ラッツエンホオフア、デュルケエム、ヲオド以下の多數學者の社會學は實際其內容の大部分すべて社會結合の研究ではないか。而して特に注意を乞ひたきは今日米獨佛の第一流の社會學者の所說である。英國は理論社會學者を殆ど有しないから之を擧げない。獨逸社會學の雄鎭はジムメルである、ヲオド逝ける米國社會學界の泰斗ギディングスである、タルド逝きデュルケエム亡き佛國社會學界の最も俊秀なるものはデュルケエム高足ブウグレであらう。而して此三人の社會學は皆余の云ふ結合の研究そのものである。學士の言をかれば結合現象學である。勿論學士はジムメル、ブウグレ、ギディングスの著書をよまれた事であらうが、果して然らば、余の如き東海孤島の微力なる一學究の著書を

會社學奥義と嘲笑する前に、何故に此等三大學者の社會學を會社學奥義と嘲笑せられざりしか。

第三、「實在と現象との關係は二著千八百頁を通じて徹底せず」(六〇〇頁)と云ふ事。これに就いて答へる、學士によればリッカアトの所謂經驗的實在と西田博士の直接經驗とが同一である(六〇一頁)。然れども直接經驗は未だ何等の範疇に入らぬ先概念的のもの、經驗的實在はそれが構成的範疇によりて構成せられたるものではないか。かゝる本誌に書くのは誠に恐縮であるが學士に對してはこれを述べる必要がある。學士の論駁の全文の根抵が社會は實在であり社會現象であると云ふ事であつて、實在や現象と云ふ事が其中心の事項であり論據であるのに、此粗大なる誤謬は其立論の基礎を破壞して居る。

而して學士の大膽は之に止まらない、更に進みて曰く、「學士(余)が一方ベルグソン一派の思想に從ひ經驗的實在は所謂異質的連續をなしintensiveにもまたextensiveにも無限なる多樣性を有し從ひて各決して反覆して現はるゝ事なき個性を有すと云ひ他方經驗的實基は思惟が材料として受取るものに非ずして既に思惟が構成し來れるものなり卽ち思惟の規定にまちて始めて成立するに至れるもの(中略)と云ふは右に實在先天說をとりて左に實在後天說を掘り右に範疇後天論を採りて左に範疇先天論を掘るものにして矛盾杆格の非難を見れず」(六〇一——六〇二頁)と。此點に就いて學士はまた事實の製造者である、余は明にリッカアト說の叙述として以上の事を書いて居る、然るに拘はらず余が一方ベルグソン一派の思想に從へりとは些々たる事ではあるが事實製造の第四例である。また學士が矛盾杆格となす前後の思想が其にリッカアト說の一部に過ぎない事を學士は知られざるや如何。而してそのいつこに矛盾ありや、いづこ

に所謂實在後天說、範疇後天說ありや。かゝる大膽なる非難は經驗的實在と純粹直觀とを混同する學士にして初めて理解する事を得べきである。次に學士は又曰く「思惟は勿論構成範疇にも方法範疇にも等しく行はるゝ根本原理なれば之を方法的形式の認識原理となさゞるは尤も非なり」(六〇二頁)、思惟が根本原理又は認識原理なりと云ふ事文句をなすや否やは別問題として學士の意余が方法論的形式を以てする加工は思惟の作用に非ずと說いたと云ふにあるか、これは事實の製造の第五例である而して余はたゞ學士に他人の著書を理解せずして批評する事勿れと述べるより外は無い。要するに、學士は自らかゝる問題を論議する資格の有無を省みらるべきであると思ふ。

第四、心理社會學說に就いて(六〇四——六〇八頁)。此點に關する學士の非難も論理的組立を有するのではないから個條々々に吟味する。學士は曰く「學士(余)の追究する意志結合の難點は悉く皆移して以て余は學士感情結合說を衞かんとす學士以て如何となす瘧を以て盲を笑ふに似たらずや」(六〇四頁)と。然らば余は學士に求める、意志結合說に加へたる三難點を自說の上に試みられむ事を、放言は論爭の禁物である。而してかの難點は勿論意志結合說以外のものに加へらるべきものでは無い。又曰く心理社會學說は利益說と變じ而も功利倫理學說が利己說個人自利說に窮極する如く遂に利己的社會學說とならざるを得ざるものなり」(六〇四頁)「自利倫理學說の缺點を包藏せる利益社會學說」は「成立し能はざ」るなり(同頁)と。答へて云ふ、心理社會學說は利益說と限るものではない、同情說ともなりうべく本能說ともなり得る、而して利益說は余の飽まで論叙したる所ではないか。利己的社會學說と云はれるが社會學說には利己もなければ利他も無い、心理學物理學にそ

れがないのと同樣である、經驗科學と規範學とは性質がちがふ。

次に學士は曰く、「只國家は人間欲望の一方面にして職工組合は此と對等關係に立ち彼此互に其權力關係を侵犯せらるゝことなしとの謬說を露國人ならざる學士をして言はしむるに至れり」「徒に奇を好みてコオルが國家を以て a merely functional association となせしを直に取てその根本思想となすが如きは輕率の尤なるものにして憲法學上君主機關說が我國の歷史を顧みざる舶來說なるの點よりすれば學士の此譯說は所謂其 elder brother」なりと(六〇五頁)。余は如何なる機會に於て職工組合が國家と對等關係に立ち彼此互に其權力關係を侵犯せらるゝ事無しと云ひたるか。余はギルドソシアリズムの主張の一部として之れを紹介こそしたれ、自ら之を信ずるものに非ず從ひて發表もしない。紹介と主張とを取違へる程の亂雜なる讀みをせられるものに非ずとせば、何故に以上の事實を製造せらるゝか。これは學士が事實製造の第六例である。また國家を一の部分社會と見る考は余の當て哲學研究に於て「社會の全體と部分」の題の下に發表しついで社會學原理にも述べたる思想である。而してこれを以てコオルの思想をとれる譯說なりと云ふのはまた學士の製造せる事實に過ぎぬ。これは學士の事實製造の第七例である。今の引用したコオルの著書と余の前揭論文とを比較するに後者の公表は前者の發行より前であつても後ではない。また今のコオルの書を讀みたるは社會學原理擱筆の後である。描くとも自分の苦心して作り出したる考が濫りに譯說呼はりをせらるゝ事は忍ぶ能はざる所である。又學士は國家を機能社會なりと云ふ見方を以て君主機關說の elder brother なりと云ひ、危險たる學說なりと云ふ、君主機關說は法律解釋學上の一學說である、國家機能

社會說は法則學上の一學說である、之れを同列に置くのは二種の學問の差異を認め得ざる見方である。法律解釋學の上にこそ危險思想はあれ、法則學上の學說に危險不危險の性質のあるべき道理はない。

學士又曰く「學士(余)が社會形態論に於て論ぜらるる如き社會契約說國王私產說乃至は人民主權說革命放伐論の謬說を覆論するの愚を敢行するに至るべし」(六〇五頁)と。敢て學士に問ふ、余は社會形態論のいづこにかゝる學說を述べたるか。一例を社會契約說にとる。社會契約說は意志結合說の一種である、而して意志結合說は(余は其の價値を十分に尊重するものではあるが)余の極力非難を加へたる所ではないか。學士は意志結合說と社會契約說との學史的聯絡を知らざるものと見ゆる。否八八頁八三四頁に於て余は明に社會契約說を否認して居る。加之、社會學原理の同卷は此否認の證據である。學士の言は明に事實の製造である。而してこれを事實製造の第八例とする。

次に學士は曰く「社會を實在と見ず卽ち溯りて學士の所謂經驗的實在と見ざるに於ては學士は認識論上社會學の認識を有せざるなり認識なき社會學原理及社會學的研究とは抑何物ぞや認識なくして學を立てんこと羽なくして空を飛ばんに似たり自家撞着の極みと云ふべきなり」(六〇六頁)と。認識論上社會學の認識を有せずと云ふ文句は何事を意味しうるかを知らない。併しながらリッカアトの經驗的實在と純粹經驗とが同一であると云ふ樣の學士の知識によりてならば余は如何なる漫罵をも何等の不安なしに甘受する。而して余は序に學士の社會の觀念を檢してみたい。學士によれば、「社會は實在なり有機體なり」(六〇六頁)、また、社會は經驗的實在なり(同頁)、また學士は「社會實體觀」をとる、卽ち社會を實體と見るものであ

る(同頁)、また學士によれば社會は實在にして社會現象は現象である(五九七頁——六〇〇頁)、社會は體にして社會現象は用である(五九八頁)。而してまた經驗的實在は純粹直觀なり(六〇一頁)。實體と現象との考は素朴なるカント以前の見方である、經驗的實在純粹直觀の考は勿論カント以後の見方である。此の二者が混同して用ひられて居る、加之、學士の考を推しつむれば、社會は有機體であり、實體であり、經驗的實在であり、又純粹經驗であるべきである。思想の混亂實に驚愕に値する、此の如き思想を以て他人に向ひ「實在と現象との關係は二著千八百頁を通じて徹底せず」と云ひ得る學士は幸なるかな。

學士はまた曰く、「生物個人は天然を基礎として其厥初より集團社會を形成」せり(六〇七頁)、「集團性論を正しとするものなり」(五九六頁)「吾人は學士(余)に反し極大性を有する先天的集團性を以て擴大性の社會構成原理となす」(六〇七頁)と。學士の集團性は余の云ふ群居の欲望を外にして何物でもあり得ない。之に基いて社會が形成せられるど見る點から余に反對せられる理由はないと思ふ。たゞ學士は生物が本來生物として集團性を有すと說かれるが、動物に孤居するものゝ少からざるのは何故であるか、生物が生物として集團性を有するならば孤居を好む動物はない譯である。「學士(余)が千八百頁の社會學行旅の失敗は抑も此禽獸草木を其門出に捨てたるにあり」(六一二頁)と云ふ學士は他人に此事をせめるよりも自らに對して責めらるべきである。また學士によれば「集團性は學士(余)の云ふ欲望と異なり知情意分別以前の未分直觀狀態」(六〇八頁)であると云ふ。未分直觀狀態が如何にして集團性と云ふ概念を以て表はさるゝか。

なほ學士は隨所に社會有機體說を主張し、米田

先生と余との心理社會學說を攻擊せられて居る。社會有機體說の價値に就ては學界既に定說あり、玆に敍說を要しないと思ふ。心理社會學說に就いては日本社會學院年報第一年分所載の米田先生の論文の熟讀を請ふ外はない。若し學士の攻擊にして論理的組立を有するものであれば進みて說きたいのであるが、たゞ一の揚言に止まるが故に之に就いては更に以上を述べない。

（二）社會法則概說。此項も何等の論理的組立がないから箇條書きに答辯を試みる。學士は曰く「米田高田兩氏の如く此心理現象を人間の心理現象にのみ限るは微生物學動物心理學植物細菌學の業績よりして些の理由ある事なし」（六〇九頁）と。學士に問ふ、米田先生も余も何時心理現象を人間の心理現象に限ると云ひたるか、これは學士が事實製造の第九例である。學士は又曰く、「殊に學士（余）が物心二現象の獨立不關涉を論ずるが如きは獨斷の甚しきものにして謬論と言ふべし精神現象の排泄作用にホルモン分泌液の推理記憶作用に著しき影響あるの實例は悉く學士の所說を覆」す（六〇九頁）と。余のとれる生理心理平行論の立場が獨斷の甚だしき謬論とは意外である、學士は此平行論が心理學者と哲學者の多數に支持せらるゝと云ふ周知の事實を知られざるか、而して學士の說く物心相互作用說こそ素朴の獨斷說として斥けらるゝのを知られざるか。學士は又曰く、法則が「心理現象には之れなしとの見解は最皮相的なり」と、而して其の論證に曰く刑法上の因果關係私法上の一方双方の意思表示不法行爲危險負擔の諸問題は皆心理現象に法則ある事を前提とするからであると。學士によれば、法律の條文に地球より太陽が小いと云ふ事があれば、地球が小いと云ふ天文學者の所說は之に破壞せられるのであらう。

（三）社會學社會科學及社會進化論の性質地位（六

一二――六一四頁)。この中には社會學社會科學の關係が說かれてゐるがそれは前に述べて置いた。次に學士は曰く「學士余は禽獸草木をも有情者中に包含し忽ち社會學の對象を定むるに當りては之を人類のみに制限せり、何の故ぞや、只學士は便宜上と云ふ便宜上とは頗る不徹底の言語なり」「學士の此二大著述も便宜上成れる間に合せものか偖ては眞學精讀せんも徒勞の極みぞよ、余を以て見る學士が千八百頁の社會學行旅の失敗は抑も此の禽獸草木を其門出に捨てたるにありと(六一二頁)と。余は學士に答へる、學士は余が社會學の對象を定むるに當りて之を人類(社會)のみに限局せりと云はるゝが、之は學士が事實製造の第十例に數ふべき誤りである。余は社會學の對象を人類社會に限局したる覺はない、たゞ『社會學原理』に於ける論述を人類社會に限りたるまでゝある。余は明に「動物社會はそれ自體として社會學の對象をなすのみならず、またその研究によりて人類社會の性質を明ならしめ得可き點あり」(社會學原理三頁)と述べて居る。余は社會學の對象を便宜上人類社會に限れるのではない、一般心理學が人類の意識を論じて比較心理學兒童心理學に動物兒童の意識の研究を要するが如く、社會學原理に於て人類社會を對象となし、動物社會の研究を動物社會學に讓る積りである、此區分は分業の必要から生じたる便宜上の事のみ。加之余を以て禽獸草木を其門出に捨てたりと云ふ學士は余の著書を一讀せられしや如何(學士は余の二書を評すゝ云ひながら事實其取扱はれたるものは社會學原理の第一章社會學的研究の第一、二章に過ぎぬ)、一讀せずとならば致し方なし、一讀せられたりとならば、學士はまた事實の製造を敢てするものである。余は論述の範圍をこそ人類社會に限りたれ、理論の關係する限りは常に動物社會を併せ考ふる事を怠つ

ては居ない。此點に於てはワイスワイラアを除けば從來の社會學原論著者の何人よりも多大の努力を費した積りである。例へば社會學原理二二二—二二四頁、二二七—二二八頁、二三〇—二三一頁二三四—二三六頁、二四八—二四九頁、二五七頁二八〇頁乃至三〇五頁、三三八—三四〇頁、三四五—三四七頁、三五九—三六〇頁の如きは大抵動物の結社を取扱へて居る。此の如くにしてなほ禽獸草木を門出に捨てたりと云はるゝか。なほ學士は社會進化論の事に就いて述べらるゝも論旨不明淺學の余は遂に理解し得る所がない。

問題も既に盡きたるが故に、最後に、總括的の事を述べたい。數ならぬ余の拙著をよし一部分にても目を通し態々批評の筆を執られたる事に對しては重ねて其勞を謝する次第である。たゞ余は次の三點を遺憾に思ふ。第一は學士が數多の事實を製造せられたる事である、而して此等の製造せられたる事實の中には余の頗る迷惑を感ずるものがある、現に學士自身また此製造せられたる事實を基礎として余に取りては極めて迷惑なる非難を下されて居る。學術上の批評に於けると否とを問はず、學士の如き態度が許され得るものなりやを疑ふ。第二は學士が論理を無視せらるゝ事である。前述の如く犬は動物なり故に動物は犬なりと云ふ如き學士の論法は全體の論理の如何なるものなるかを語つて居る。余は學士よりして「系統論理の精確は學究の生命なりと」云ふ語を聞くに及び異樣の感なきを得ざるものである。第三は學士の用意である。其一例をとりて述べたい。學士の立論の全體は實在と現象との關係と云ふ點に立つ樣である。然るに前述の如く或は經驗的實在と直接經驗とを混同し、或は一方には社會を經驗的實在となし他方には社會を現象に對する實體となすなど學士の思想は混亂を極めて居る。學士の全批評が

かゝる混亂せる思想と誤れる論理と事實の製造との上に立てるが故に一として余を承服せしむる所なくして、余をして屢學士の反省を求めしめるに止つた。

最後に附言する、學士にして此の如き用意と此の如き論理の上に立たるゝ間は、學士との間に幾度論爭を重ぬるも學問の進歩に何の貢獻もあり得ない、徒に勉學の時間を空費する許りである。學士にして相當の用意をなし、其論理を改造し、事實の製造を斷念せらるゝまで、而して自ら狂犬の如しと稱せられたる態度を改めらるゝまでは再び學士に對する論爭の筆を執らない積りである（大正八年十月二十五日）。

學界近況

ドイツセン教授逝く 一八八九年以來今日に至るまで三十年間、獨逸キール大學の教授として哲學を講じ、特に印度哲學のために心血を濺ぎ、世界の學界を刺戟し貢獻しつゝあつた老大家パウル・ドイツセン教授(Prof. Paul Deussen)が七十四歳の老齢を以て本年六七月の頃、浪荒き北海の岸邊に永への眠りに就かれたといふことを朝永先生から聞いたのはつい最近の事である、その長逝が何日の出來事であつたか確かに知る事が出來ないのは甚だ遺憾に思ふが、併しケルンで發行せる Kölnische Zeitung の七月十一日號にその訃が報ぜられて居るのを見ると恐らく七月上旬であらう。

教授が哲學者印度哲學研究者としてその名聲を世界に博して居る事に今改めて言ふまでもない、苟も印度哲學に志を傾けんとするものにして未だ教授の名を知らぬものは恐らく無からう、專攻の學生はその研究の初めに當りて教授の著書中尠とも一二部は必ず先づ讀破せねばならぬとさへ言はれて居る位である、特にかの「一般哲學史」や「六十優波尼沙土」等の如きは實に學界稀に見る大著であらう、教授の學說が本邦印度哲學研究者に及ぼし尙及ぼしつある影響は亦決して尠くはないと思ふ。

教授の哲學一般に關する學說は多くショーペンハウエルの學說